血ヲ面ニ流シカケ、切テ落シタリツル敵ノ頸鋒ニ貫キ、トツ付ケニ取著テ、只二騎、將軍ノ陣ヘ馳入ル、

〔隣女語言〕髪のふゞき

順集に

君きかばなけほとゝぎす黒髪のふゞきになれば我もおとらず、髪のふゞきになるとは、頭如飛蓬と詩經にいへるがごとし、皇極紀に、山背王之頭髪班雜、毛似山羊といへる心なり、

〔倭訓栞中編四〕かみあげ〇中略　日本紀に結髪をよめり、貫之集に、女四のみこの御髪あげの屏風のうたと見ゆ、はなち髪を初て結ふ事也、是夫への禮也、文選古詩にも、髪を結て夫妻となる、白氏文集にも、守君結髪五載と見えたり、よて結髪をいひなづけの事にも用ゐたり、また婚禮の時は、さげ髪を禮とし、夫婦の盃すむと髪をあぐるも此意なりといへり、萬葉集に、童女はなりは髪上らんかと見えて、西土に許嫁笄而字と同じ、伊勢物語に、

くらべこしふりわけ髪も肩過ぬ君ならずして誰かあぐべき、うつぼ物語に、弟の宮は四ッ御ぐし肩わたりにてと見ゆ、又陪膳の女官など、すべらかしをあぐるをもさいへり、也足軒の說に、内の女房は晴の時は、髪上とて、釵して髪をいたゞきへ上る也と見えたり、禁中に御髪上の祭といふ事あり、御髪は藏人此を勤む、臘月に至り日を撰み、年中の御髪の屑を燒上る也とぞ、神代紀に、結髪とあるを、古事記には、解御髪と見えたるは、上代に結といひしは、本をあつめ擧て結て、其末は後ろに垂たる成べし、こゝに結とあるは、其末の垂たるを擧結びたる所を解くなれば、實は同義也、神功紀に、解髪とあるも是也、天武紀に、男女悉結髪と見えたる、頭に結綰（ワカネ）て髻（モトドリ）と成をいふ成べし、よて後の詔に、婦女垂髪于背猶如故とありて、上代の風のまゝ也、萬葉集の歌にも、髪あぐる事を多くよめるも、彼本を結と末は垂る也とぞ、伊勢物語に、うちとけて髪を卷上てと見えたるは、